

スチュワート法で紐解く酸塩基平衡

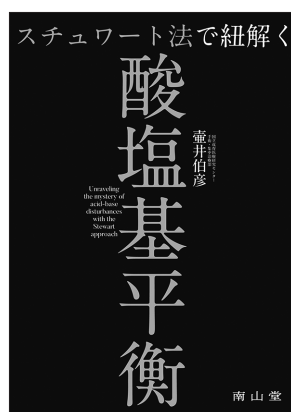
著：壺井 伯彦

「霧の中の酸塩基平衡」に灯りをともす、待望の一冊

スチュワート法を体系的に学べる日本語の成書が限られている中で、本書は「原法から臨床応用まで」を一貫して理解できるよう、丁寧に導いてくれる一冊である。Peter A. Stewart が1983年に提唱した酸塩基平衡の概念は、病態の因果関係を深く洞察できる点で優れているものの、扱う変数が多く計算も煩雑で、原法と改変法が混在していることもあり、初学者にとっては敷居が高い面があった。本書は、そうしたハードルを取り除き、読者がつまずきやすい点に寄り添いながら、理解の足場を築いていく。

冒頭では、医療者が必ず通る「Physiological approach」に触れ、手順を追って考えても「何を、なぜ行うのかが見えにくい」と感じてきた多くの読者の感覚に寄り添っている。著者自身も同じ戸惑いを経験してきたことが示され、読者にとって一つの安心材料となる。Stewart 法に「難しそう」という印象がつきまどってきた背景も丁寧に拾い上げ、第1章では高校化学の復習から始まり、理論に無理なく橋渡しされる構成となっている。

臨床応用の面でも本書の実用性は高い。付録の「SIG 計算シート」を使えば、複雑な病態の構造を整理し、治療戦略を論理的に組み立てやすくなる。また、「pH 計算シート」によって、臨床で生じる「もう一歩先を知りたい」という疑問、すなわち治療介入後に pH がどのように変化するかを、実際の計算を通じて予測することもできる。さらに、糖尿病性ケトアシドーシス、水中毒、生体肝移植など多様な症例が示され、数値の変化を追いながら理論と臨床判断のつながりを実感できる。



B5判/136頁

定価：3,960円（本体3,600円＋税10%）

発行：南山堂（2025年11月）

酸塩基平衡を苦手としてきた医療者にこそ、本書を勧めたい。Stewart 法の複雑さに距離を置いていた読者の前に、霧に包まれていた「酸塩基の地形」が立体的に姿を現すだろう。輸液や電解質、栄養管理と密接に関わる酸塩基平衡の理解は、薬剤師にとっても重要な基盤である。救急・集中治療のみならず、一般病棟でも役立つ一冊である。

国立成育医療研究センター 薬剤部 大穂 祐介